

(熊毛郡中種子町大字増田字千草原)

位置と環境

遺跡は町の中心部から北東へ約2.5km離れた、千草原台地と呼ばれる標高約120mから140mの台地上に立地している。台地の広がりには80haにも及び中種子町内でも有数の畑地帯である。

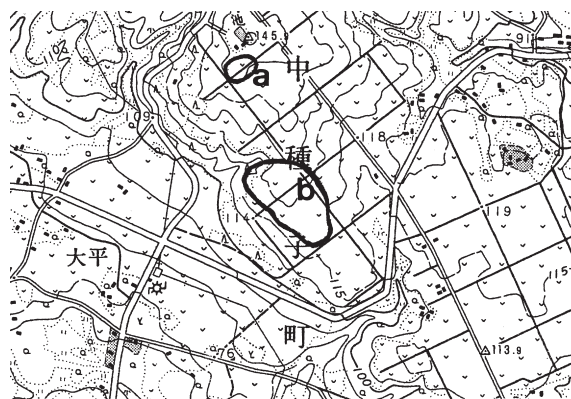
調査の経緯

昭和42年の12月から始まった県営圃場整備事業において、地区内の78区から80区にかけてブルドーザーの整地中に遺物が錯乱しているのを中種子高校地歴クラブ員が発見した。採集された遺物が塞ノ神式・轟式・曾畑式などの土器片と石器であったことから縄文時代早期から前期にかけての遺跡であることが分かった。このことにより、遺跡の重要性と破壊による記録保存の必要から、中種子町の事業として中種子高校の教員であった盛園尚孝が調査責任者となり酒匂義明の参加を得て、中種子高校地歴クラブと増田中学校郷土クラブ員の協力によって、昭和43年2月に緊急発掘調査（第1図a）を実施した。3か所の試掘調査により58㎡が調査された。その後、昭和48年に畑地帯の整備事業に伴い発掘調査が実施された（第1図b）。

遺構と遺物

出土した遺物は、耕作により攪乱を受けた表層が弥生時代後期の遺物包含層で、土器片と磨製石斧・磨製石鏃といった石器が出土し、土製の紡錘車も出土した。表層下には、ピットや溝状の遺構が下層のアカホヤ火山灰層に食い込んで一部残存しているのが確認された。また、アカホヤ火山灰層下は赤褐色の粘質土層でこの層の上部でから塞ノ神式土器・轟B式土器・曾畑式土器片が出土検出されたほか、打製石鏃も出土したという報告がある。しかしながらこの調査は試掘にとどまったため、これらの土器について、層位関係を明らかにするところまではいかなかった。

昭和48年の調査では、塞ノ神式土器（第2図2・3・4・5・6・7）がアカホヤ火山灰層の下に出土し、その火山灰層の上層からミミズばれの凸帯文



第1図 千草原遺跡の位置

を有する轟式土器・曾畑式土器（第2図1）が出土した。そして一番上の層から弥生式土器が出土している。

特徴

本遺跡では、アカホヤ火山灰層の上下において縄文時代早期と縄文時代前期の遺物の層位関係が明確に確認されたということで貴重な遺跡である。また、遺跡の広がりには広範囲になると考えられる。

資料の所在

出土遺物は、盛園尚孝宅に収蔵・保管されている。昭和55年3月26日に遺跡地は、中種子町指定史跡。

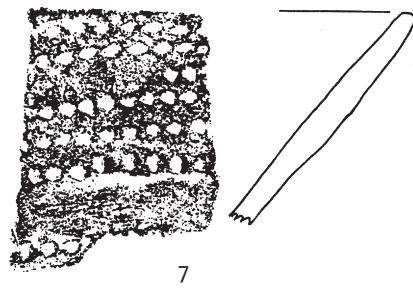
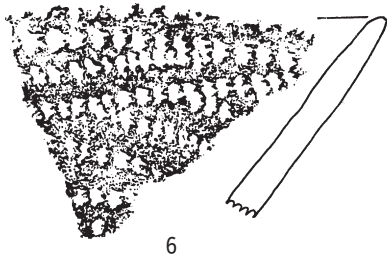
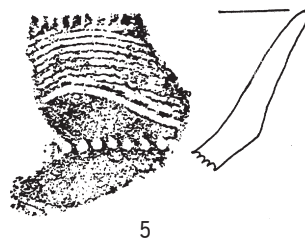
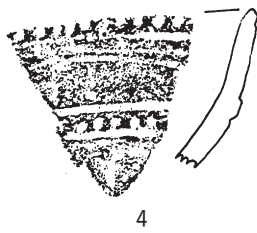
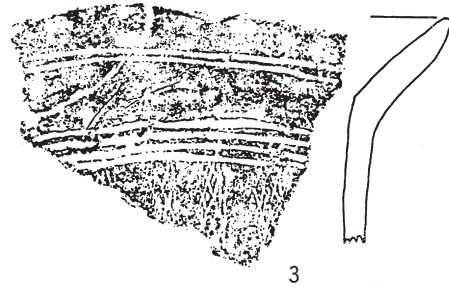
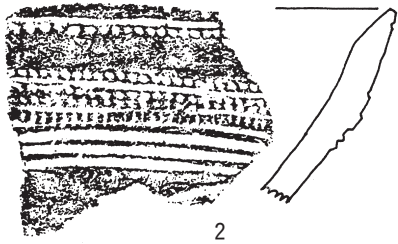
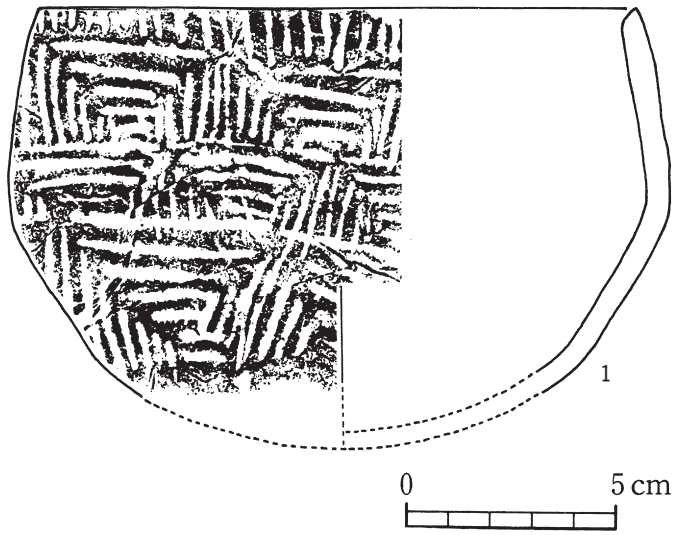
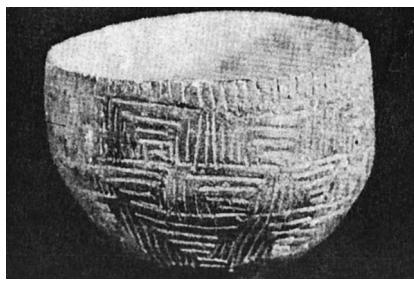
参考文献

中種子町1971 『中種子町郷土誌』

(田平祐一郎)



写真1 現在の千草原台地



第2図 千草原遺跡出土土器